

一八八四年二月三日(日)

狂気の様子——素直と眞実の話

今日は日曜日。キリスト暦一八八四年二月三日(ペンガル暦一二九〇年マーグ月二十一日)、マーグ白分七日目。昼食の供養を受けられた後、タクールはご自分の場所に坐っていらつしやる。カルカッタからラームヤスレンドラをはじめとする信者たちが、タクールの病氣のことを心配してお見舞いに來ていた。校長もそばに坐っている。タクールは腕に副木を当て、包帯を巻いた姿で信者たちと話しておられる。

〔以前の話し——狂気の様子——ジャンバザールにて——素直と眞実の話〕

聖ラーマクリシュナ(信者たちに向かつて) 誰にも隠し事ができない境地に、マーはわたしを置きなすった。幼な子の状態にさ!

ラカールは、わたしのこの境涯がわからないんだ。誰かに見られて悪口言われないうにといいわけで、体に布を着せて腕の怪我を隠すんだよ。マドゥ先生を物陰に引っ張って行つて、何か話し合っていた。わたしはその時、大きな声で言ったよ。——『マドゥスーダナ、どこにいるんだい? 來て、

見ておくれよ。わたしの腕は折れちまったんだよ！」

シエジヨさん(マトール氏)とシエジヨさんの奥さんが寝る部屋に、わたしも寝ていたんだよ！あの人は、ほんとに自分の子のようにして、わたしの世話をしてくれたものさ。あのころ、わたしは気がふれたような有様だったからね。シエジヨさんが、「ババ、あんた、私たち夫婦のしている話が聞こえているの？」と言うから、わたしは、「ワカルヨ」と答えたものだ。

シエジヨ奥さんが、シエジヨ旦那のことを疑うようになって、旦那にこう言った——『どこかにおいでになるときは必ず、このお坊様バツタチャルジェー・バープをいっしょにお連れして下さい』ある場所へ行って、わたしを下の部屋に坐らせておいた。そして三十分ほどしたら戻ってきて、『さア、帰りましょう、ババ。馬車に乗って帰りましょう』と言った。シエジヨ奥さんに訊かれたとき、わたしはありのままを答えたよ。こんなふうだね——『えーと、一軒の家に私たちは行つた。あの人はわたしを下の部屋に坐らせて——自分は二階に上がった。三十分して下りてきてこう言った。さア、ババ、帰りましょう！』シエジヨ奥さんは、よくわかつただろうよ。(訳註、バツタチャルジェー・バープ——アヒ祭祀を執り行うことができる最も高い地位の聖職者の尊称。バープは旦那のこと)

マトール家の土地の者が、ここから果物やキャベツなんかを車にのせては自分の家に運んでいた。ほかの仲間たちに聞かれたとき、わたしはありのままを話したよ」